The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中岡成文著『試練と成熟 ー自己変容の哲学ー』（大阪大学出版会、2012）合評会
Author(s)	
Citation	臨床哲学. 2012, 14(1), p. 48-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24259
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中岡成文著『試練と成熟　―自己変容の哲学―』（大阪大学出版会、2012）合評会

・第 29 回臨床哲学研究会　2012 年 7 月 15 日（日）
大阪大学豊中キャンパススチューデント・コモンズにて

・評者：
村上靖彦（大阪大学人間科学研究科　准教授）
文元基宝（大阪大学文学研究科　博士課程前期在籍）
田中俊英（NPO 法人淡路プラッツ　代表）

Ⅰ　評者と執筆者 [1]

1　評者：村上靖彦より

●　境界論として／具体的な事例と抽象的なシェーマ

村上：

自分は臨床哲学と縁がないわけではないが部外者である。それゆえ批評するに辺り臨床哲学で共有されている文脈から外れることもあるかもしれない。

この本を最初に読んだときの第 1 印象は難しい本だということ。第 1 章は具体例が非常に多く、君子豹変の話、スポーツ選手の鍛錬の話、ドイツに留学されていた時のお子さんの話、アリストテレス、目的論、ガンの化学療法の話等、どんどん出てくるが、これらの例がどうつながっているのかがつかみづらかった。

しかし 2 回目読んだ時に気がついたのは、本書は具体例から出発しているが、実は非常に抽象的に考えられているということである。とりわけ境界論、境目に関する抽象的な議論がなされており、その中で具体例が扱われていることが分かってくると読めるようになった。

1　各評者によるレジメは文末に掲載

これは中岡さんの長い蓄積と経験の中で浮かび上がってきた思考であることは間違いがない。経験があり、蓄積があり、それらを非常に抽象的なシェーマに落とし込み、境界論と呼べるような、境界をめぐる思考になっている。抽象的なシェーマが出来上がった後で、もう一度具体的な例をあてはめ本を組み立てているのではないかと思う。
私は自分でもインタビューをして研究しており、具体例は非常に大事だと思っている。例えば看護師にインタビューをし、それを分析する作業をしている。具体的な事例からボトムアップするということと、そういう抽象的な思考やシェーマ、概念装置をどう折り合いを付けるかという問題は、私自身にとっても重要である。本書での中岡さんの解決策は具体例と抽象的なシェーマとのあいだの振幅が大きい。どこからこの方法が由来したのかと思ったが、おそらくモデルはヘーゲルの『精神現象学』ではないかと、本書を読む限りでは理解できる。例えば５頁にこう書いてある。

> 「『精神現象学』の圧倒的な豊かさと多様性を統御するのは、一方においては精神が「絶対知」にまで発展するという、今となっては疑わしいロゴス中心主義的構造化であるが、他方においてその構造さえ自ら掘り崩していく活き活きとして強靭な現実感覚でもある。」（『試練と成熟』5）

もちろん、『精神現象学』では非常に抽象的な弁証法を使って議論が進むわけだが、「主と奴」の場面や『アンティゴネー』など様々な具体例が出てくる。つまり非常に具体的な事例に満ちた本だが、この本を事例集として読む人はいないし、非常に抽象的な思考の産物なのだろうと思う。同じように中岡さんの本も非常に抽象的な思考のもとに、ただし正反合のような装置ではなく、境界論という装置を使って作られているのだと思う。
中岡さんによれば、ある境界があった時に、その境界は確定的なものではない。その境界をまたいで、例えば主客のようなものがあればそれが反転することもある。境界自体がゆらぐこともある。主体の側が作り出す規範秩序が壊れたり揺らいだりすることもある。その相互作用が問題になることもある。主体と客体の間に境界線があると思っていたら主体の内側に戻って別の境界が生まれてきてしまうこともある。主体が消えていき非人称になってしまうこともある。このように境界という問題設定をしつつ、その境界が消えたり、ゆらいだり、反転したりする、そういう運動として提示される。

● case と example ／事例が私を選ぶということ

境界論を使って具体例が考えられていくときに、そこで扱われる事例とはいったい何なのか。それが私の問いである。例えば case と example を考えた時どちらになるのか。例えば「幾つか例をあげてみよう」という表現が出てくるが、これは example にあたる。すなわち答えが既に与えられており、それに対して例をあげるのが example である。それに対しそうではない箇所もある。158 頁にはこうある。

> 「私は、「何でもいいんですけど……」という前置きで語られる、凡百の実例からたまたま拾い出された実例を「事例」とは認めていない。事例は主体が任意に切り取る（能動）ものではなく、むしろ事例が私を選ぶ（私は受動）とさえ考えている。もっと慎重な表現に頼れば、私にとって特権的と感じられる仕方で私は事例に出会い、長年かけてそれを「持ちこたえ」、そのさまざまな意味合いのひだを少しずつ悟りつつ、それが他ならぬ私の事例であることを実証するのだ。」『試練と成熟』158)

ここが特徴的だと思うが、中岡さんがこだわっておられる事例は case なのだが、それをダイレクトに分析するのではなく「持ちこたえる」。長年かけて持ちこたえ、そこで抽象化される。持ちこたえるということをすることによって、経験された事例（case）が抽象化され、本書が執筆された時に再度持ちこたえられる。しかしそのプロセスが見えにくいため、あたかも example であるかのように見える。だから私のように、長年持ちこたえずに分析してしまうタイプとはやり方が違うのだと思う。

● 宮沢賢治『セロ弾きゴーシュ』の解釈をめぐって

この点に関して、批判ではないが、私であればこうは書かないだろうと思う箇所がある。それは『セロ弾きゴーシュ』を分析した箇所である。中動相[2]を議論している箇所で、主

2　著作の中では主に「中動態」と記述されている。「インド・ヨーロッパ語族のなかでも古典ギリシャ語などに「中動態」という文法があったことに、ここで注目したい。中動態 (または中動相) とは、主体がただ一方的に働きかけるだけでも、一方的に被るだけでもなく、行為の結果が主体自身に返ってきて主体がかわる点に、特徴がある。」（『試練と成熟』122）

体と客体が相互作用するという主張の例として挙げられるのだが、中岡さんは作品からの長い引用をされていない。もし私が同じ内容を語るなら、中岡さんの主張にはまったく賛成だが、相当長文の引用をしたと思う。もしかしたら全文引用したかもしれない。
その理由は、事例は、私の研究においてはということだが、ディテール（細部）に神がやどっているため、要約してしまうと事例が事例でなくなってしまうように感じるからである。物語であればディテール、インタビューや参与観察であればノイズ、つまり本人の意図と関係なく言い間違いをしてしまったり、言葉遣いに癖があったり、話題が飛んだりする。これらノイズが事例にはたくさんある。私にとって分析のとっかかりになるのは、ディテールやノイズである。これを無視すると背後にあるものがみえてこない。そのため私にとって引用は非常に大事である。

> ゴーシュは思わず足を上げて窓をばっとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとなった窓のあとをかっこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなってしまいました。ゴーシュはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがって睡ってしまいました。
>　次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯のんでいますと、また扉をこつこつ叩くものがあります。
>　〔…〕ゴーシュはその〔狸の子の〕顔を見て思わず吹き出そうとしましたが、まだ無理に恐い顔をして、〔…〕。（宮沢賢治『セロ弾きゴーシュ』青空文庫から）

ゴーシュは楽器の練習を始める時だけ水を飲むが、ネズミの時だけ飲まない。これはなぜか。あるいは最後の場面で水を飲むが、なぜ水を飲んだのか。これらの問いに対し答えがあるわけではないが気になる。
また猫を閉じこめようとして部屋の鍵を締める。かっこうを逃す時に窓が壊れる。あるいは扉を叩くものがいる。つまり境界線の問題が強調されている。今まで述べてきたように、中岡さんの本の主題は境界論であり、主客の反転が問題になっている。『セロ弾きゴーシュ』ではこれらの問題が空間構造として描かれており、非常に重要なテーマであって、これをどう理解するかということが私にとっては興味がある。
あるいは「笑う」ということ。主体が変容するに従ってゴーシュは笑うが、この「笑い」

は何なのか。あるいは動物はこらえきれなくなる。ネズミのお母さんはこらえきれなくなり「やめてくれ」という。猫は切なくなってきて「やめてくれ」という。しかしここでいう「こらえきれなくなる」とか「せつなくなる」というのは、現代の私たちとは異なる意味で使われているようにも見える。これは何なのか。ゴーシュの音楽の中にあった何かがこらえきれないのだが、それは何なのか。中岡さんの議論から思うのは、「自己の底のもの」にあたる何かではないかということ。だとすると、自己の底のものが、他者とある仕方で関係したときに、こらえきれないという関係を結ぶことがあるのではないかという問いが立てられるかもしれない。ゴーシュの音楽は治癒的な意味を持っているおり、動物たちが変容している。かつ、ゴーシュが下手だった時から動物たちは変容している。これはどういうことなのか。どういう変容だったのか。
これらの問いは引用を行った上でディテールを読まないと見えてこないし、そのとき初めて抽象的なテーマと事例とが出会うことになるように思える。

● 「もの」とは？／ドイツ観念論との関係

最後に、「もの」という概念が何回もでてくるが、「もの」とは何か。
１回目は「自己の底」というテーマとともに登場し、２回目は、「もの」は登場しないが、老いのテーマが同じことを指していると私には見えた。第２章で老いや弱さと折り合いをつけるという話を変容論の最後でしているが、これも自己の底の問題と関連づけてよいように思える。中岡さんの『ハーバーマス』[3] の冒頭にハーバーマスのシェリング論が出てくるが、ここでのシェリングにおける自然概念と関係しているようにも見えた。

ドイツ観念論が臨床哲学の中で、現場と関わる中で、どのように生きてくるのか。私自身は現象学者で、普段使う文献は現象学者や精神分析に関するものが多いため、非常に興味がある。私自身は詳しくないが、ドイツ観念論に結びつけることができたなら非常に豊かな成果になると思う。

3　講談社よりシリーズ『現代思想の冒険者たち』の 1 冊として 1996 年に刊行。2003 年に『現代思想の冒険者たち select』にて再版。

● アゴーン（闘争）としての臨床哲学

中岡：

まず特定質問者の方々にこの役をお引き受け頂いた事に、またこの会場にお越し頂いた皆様方にもお礼申し上げる。私は自分の書いた文章について説明責任は果たすつもりだが、私自身も楽しみたいと思っている。皆さんもこの本やこの研究会を刺激として受け止めて頂けたら嬉しいと思う。もう１つ、臨床哲学についてこの本では触れたり主張したりしているわけだが、この本に書かれてあることと臨床哲学がはたして結びつくのか、疑問に思われる方も当然いらっしゃると思うが、ご指摘頂ければと思う。私は、臨床哲学は決まったものではなく、昔の武士が流派を立てたように、アゴーン、つまり闘争、争奪するものであって、私はこういうものだと思うという元気のある人がいれば、どんどんそれを言ってもらえたらいいと思っている。そして私も言う元気があったからこの本を書いた。
村上さんのご質問だが、全てにお答えすることはできない。可能な範囲で私が気づいたことをお答えしていきたいと思う。

● 事例関連の質問について／抽象的と言われて

まず事例関連のご質問について。経験を叩き台にしていったん消化した上で、非常に抽象的なシェーマを作成している、という点だが、抽象的と言われるとややひっかかる気もするが、私の発想は結局そうなのかもしれないとも思う。例えば村上さんがたずさわっておられるインタビューが私にできるかと考えると、できないかもしれない。相手の文脈にべったり沿ってしまうか、自分の言葉に還元してしまうか、どちらかになりそうな気がする。これはお答えにならない気もするが、例えば、私の母親がそうだが、話を簡単に要約することができない人がいる。私の言いたいことはこういうことだ、ということができない。あの人がこう言った、それに対してこの人がこう思った、こう答えた、というような文脈の中での話が永遠に続くような、そういう風な会話の仕方しかできない人がいるが、そういう人と自分との違いというものを時々考える。私の場合はその素材がもっている手触りや局面を適当にたたんでしまっているのだと思う。

● 抽象について／持ちこたえることと抽象とは違う

持ちこたえているということを抽象に直結されると困る。持ちこたえているというのは、自分で選んで持ちこたえているわけではないという気持ちもある。「あちらから選ばれて」という書き方をしたが、私が手放そうとしても手放せないような、省略しようと思っても省略できないような、もしくは省略してしまったつもりでも私の中にそれが残っていて、それが後から復讐してくるとか、そちらの方からものを言ってくるとか、そのようなことと私は理解している。したがって抽象ということとは少し違うと思う。他方で、抽象ということで何を考えるかにもよる。私はルーマンの言う抽象の議論も経由しているため、抽象を悪いものだと思ってない面もある。

● ヘーゲルについて／ヘーゲルをはしょってヒントにすること

文元さんの提案により、「ヘーゲル哲学と臨床哲学」という勉強会を持ち、『精神現象学』を読んでいる。ヘーゲルをわかりやすい形に落とし込んでしまうのは欺瞞的かもしれないが、私はそうは思っていないところがある。見る人によってはそんな大切なところをはしょるのかと思えるところを敢えてはしょってでも、ヘーゲルの持っているメッセージや可能性を、現場の人というか、職業を持っている人、ヒントをつかみたいと思っている人にとにかく伝えたいと願っている。

● ディテールやノイズについては、「参った！」

ディテールやノイズの中に構造が隠れているのではないか、という点について。それとの関連で『セロ弾きゴーシュ』の分析が、村上さんの観点からいうと違うことになることについては、たぶんそうだと思う。ここでつっぱって、私の読みはこうであると言う自信はない。とりあえず「参った！」と言い、万歳しておく。

● 現場について／偶然性と時間性

現場とは何かという点について、先に述べたことと関連するが、やはり時間性ということ

だと思う。私にとって、向こうからつかまえて離さなかった現場、いわゆる現場と呼ばれるものが今まであったかというと、なかったかもしれない。もしかすると恣意的に医療というものを選び取ったかもしれず、その辺は改めて考えさせられるところである。いずれにしても、その辺は偶然性というか、時間性の中で変わっていくかもしれないという期待を持ちつつやってきたところがある。

● 「もの」について

ものとは何なのかという点について、私にもわからないが気になっている。これにひっかかるから「もの」に言及したのだ、ということが２つある。１つは、いわゆるなまなましい、もしかすると村上さんがノイズと言われたことに関連するかもしれない。もう１つは、ヘーゲルが、自己を敢えてものに還元するということを言う、ヘーゲル弁証法の一番驚くべきところであり、他の思想家にはない、私にとって魅了的だったところである。言い換えると自己否定ということ。自己を理念的なところに送り届けることも可能であるがヘーゲルはそれを嫌がり、むしろ自己の理念的なところを否定する。その意味で、非常になまなましいものという側面と、自己否定的なものという側面とが「もの」の問題圏にはあり、さらにいえばその両方が老いというものに結びついていくということも事実だと思う。
シェリングの自然の問題については『ハーバーマス』に書いたことは覚えているが内容を覚えていないため答えられない。

● 境界について／ヘーゲルにとって境界というものは境界ではない

境界はまさにヘーゲルの弁証法の核心そのものであるから、これをどんな仕方で答えたらいいか困ってしまう。１つだけ言うと、ヘーゲルにとって境界や限界というものは境界ではない。そこが一番観念論的なところだが、例えば人間は神というものを乗り越えがたいものとして想定する。しかし神としての「境界」を名指すだけで、その彼方に人間は既に手をかけているところがある。こういった発想は傲慢と受け止められるかもしれないが、ヘーゲルのヘーゲルらしいところだと思う。ヘーゲルの批判者は、ヘーゲルには他者がおらず常に内面に回収するというふうにいう。そういう批判はあたっていると思いつつも、私自身としては、そのヘーゲルとともにもう少しやっていくつもりである。

2　評者：文元基宝より

●　評者自身の自己変容について

文元：

この本を読んで何を言ったらよいか迷っていたが、本の中身を解説することは避け、中岡さんや臨床哲学的な運動に私が関わり自分自身がどのように変容していったのかということを、本に即しながら発表し、自分の経験を再構成してみようと思う。この本の最後の方に、「自己変容の哲学は、それを書いている私にとって、生きることそのもの、考えることそのもの、書くことそのもの」（『試練と成熟』205-206）であると言及されている。本書は、読者との相互作用と読者の変容が期待されているので、その期待に応えて、私の変容を発表することで批評したいと思う。

●　臨床哲学との出会い

臨床哲学の出会いは 2008 年頃。私は歯科医院を開業しており、その頃のテーマは予防医学だった。患者とどのように関わったらいいのかということだった。歯科医療はもっぱら治療という技術を介して患者と接するわけだが、治療行為を継続することにより、結局、歯の健康が損なわれるだけではないかという内部からの批判や意識があった。そこで予防医学や公衆衛生学につながるところから患者と関係するようになった。何を根拠に患者と付き合えるようになるのかということがテーマとなり、コミュニケーションなどについて調べていた時、中岡さんの「医療におけるコミュニケーション」という論文に出会った。それがきっかけで中岡さんとやりとりすることになり金曜６限の授業に参加するようになった。その流れで西川さん（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授）とも出会い、西川さんと共に私の医院でミーティングを開いたり、様々な活動をしたりしていく中で、私が求めている道がここにあるのではないかと考え、2010 年に臨床哲学の大学院に社会人として入学した。その年から続けて「自己変容の哲学」の授業を受けた。前期は先生が講義された後、受講者でディスカッションする形式。後期は受講者がテーマを選び発表し対話する形式。また今年の３月から「ヘーゲル哲学と臨床哲学」という読書会を開始している。

哲学はもちろん論文自体のスタイルや作法が私には全く分からずにいた。金曜５限に論文

作成演習という授業があるが、私にとっては試練であり苦痛だった。哲学の文献研究に長けている人達が哲学の文献をしっかりと読み込んで解釈をしていくが、私はそれと臨床哲学がどういう関係にあるのかと戸惑っていた。ただ最近その意義も分かるようになってきた。

● 中之島哲学コレージュの衝撃／非専門者への態度と哲学に対する幻想の変容

決定的だったのは、中之島哲学コレージュでの経験である。京阪なにわ橋のアートエリアＢ１で行われているものだが、そこでホメオパシーに関する「人が病み、治るとは どういうことか――ホメオパシーにおける生命観」というイベントがあり、ホメオパシーという代替医療を実践している医師が発表するという内容であった。私自身は予防歯科に関わる中で医療の本質とは何かを考えてきたため、その発言があまりにも神秘主義的すぎてどうしても理解できない。感情が沸き立ち、猛烈に敵意を感じた。しかし、反論しようと思うも反論できなかったり議論に長けていなかったりする自分への悔しさや、哲学ってなんだという哲学への幻滅も感じた。今は相対化して考えられるが、その衝撃が数日間やまなかった。臨床哲学のメーリングリストにも、「企画意図は何であるのか、その中身は何なのか、哲学は傍観しているだけでよいのか」ということを投稿して問うた。正直大学院をやめようかとも思ったが、メーリングリストで様々な方からの丁寧な応答があり、臨床哲学では様々な見方で医療を見ているのかということが分かった。
それから３年経ち、自分が変化したのは、私自身の非専門者への態度である。例えば先の企画（ホメオパシー）について、来ている人が発表を聞いて洗脳されるではないかという疑いをもっていたが、それは非常に失礼な話なのだと今は思う。知識の無い人は知識のある人によって情報を与えられると変わってしまうのではないかという思いこみがあった。そういう私の態度があぶり出されたのだと思う。また、哲学に対する幻想として、哲学を中立で裁定をくだす裁判官のようなものと捉えていたかもしれない。そこが１つの契機になっていたと思う。

● 現在の問題意識／知は運動ではなかろうか

「ヘーゲル哲学と臨床哲学」という読書会で考えさせられたのは、自分が何か外の形式的な真理にすがっていたのではないかということである。つまり自分の実際の最初の問い、

医療者と患者がどのように関わりあえるのかということの根拠を外に求めていた。しかし内在的な批判を繰り返し自分の知を外に外化させる弁証法的な運動というのが臨床哲学的な運動であって、知は運動ではなかろうかと最近は思っている。医療者と患者の関係を何が媒介しているのかということを、自己変容の哲学というか、中岡さんのヘーゲル哲学の流れから実践しつつ観察し研究していきたいと思っている。
話がずれるかもしれないが、臨床哲学の現場とは何かということを考えつつ、他方文献研究も必要だと思うようになった。ヘーゲル哲学の媒介概念は、いろんな意味でつながると思うが、いかに経験的な知や臨床における知を抽象化できるのか、言語化できるのかということに関わる。中岡先生が書かれた「経験批判としての臨床哲学」[4] を読み直す中で、現場のリアリティ感は担保しつつ視点を動かしていく（認識フレームを変える）ことはどのようにして可能なのか考えている。
また医療者患者関係における対話について考え、実践している。対話や双方向的な対話というものはどのように設定すればいいのか。中之島哲学コレージュのような理性的な対話があるが、私の臨床現場での人の感情や情動等のやりとりからどのように対話へと反転していったらいいのかを考えている。
村上さんも指摘していたように、ノイズやディテールがこの本では描かれていない。あるいは感情や情動に関する表現がなされていない。西川勝さんの文章はどちらかというと細部が出てきてその場に入り込むような、引き込まれるようなところがあるが、中岡さんの本は哲学という抽象的な論でできているのかなというのが率直な感想である。

● 哲学の言葉

中岡：
これも可能な限りで思いついたところからレスポンスさせてもらう。文元さんは先ほど「自分は議論に長けてなくて」とおっしゃっていたが、哲学的な用語を操ることには慣れていないといったことだと思う。私はこれまで哲学研究者としてまたヘーゲル研究者として専

4　『岩波哲学講座 01 いま〈哲学すること〉へ』(岩波書店、2008) 所収。

門用語を使った言語ゲームをやってきたわけだが、そういう自分自身に嫌気がさしているところがある。その意味ではその都度の自分の手応えを挫折させるようなところがあったと思う。つまり、こちらの思いこみかもしれないが、わからないとかできないとかいうことを言ったり態度で示したりする人がいると平静ではいられない。自分自身の言葉の有効性や射程がゼロになってしまうような気がする。研究者をはじめて 40 年ぐらい経ち、経験でもってある程度しのげるような顔をしているが、実際は質問された時に自分がどのような地点から答えられるのかというと、本当にその都度困ってしまう。そういう意味で、語れないということの原点、それも私がただ思い描くだけかもしれないが、語れない、何かできないというものの原点に返るということはやっているような気がする。
最後の方で、現場のリアリティ感を担保しながら視点を動かすことが私ができているとおっしゃって頂いたが、本当に私はできているのだろうか。

文元：
出来てると思う。授業の対話で、抽象的なところにいこうとした時にまた具体的なところにいくとか、行きつ戻りつするのを授業で感じた。

中岡：
現場性が担保できているのか自信がないところも私にはあるが、そう言って頂けるとありがたい。先に述べた、その都度の自分自身の手応えを挫折させるといったことと関係するのは、西川さんと私の違いにも関係すると思う。西川さんと私はアプローチが全く違い、私は自分の手応えを挫折させるが、西川さんは相手がわかっていないと言って、つっぱる。

● 対話について

対話について、臨床哲学の対話論的展開という言葉を小林傳司さん（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授）との対話の中で使ったことがある。ただ、全面的に賛成という意味でこの言葉を使っているわけではない。対話にはいろんな問題もある。『ドキュメント臨床哲学』に書いた時は、この言葉をいわば歴史家として使った面が強い。最近ある研究会で対話と会話の違いについて議論もされていたが、そういったこととも絡めて引き続き対話について考えていきたい。

３　評者：田中俊英より

●　この研究会は閉じられていない

田中：

ユーストリームで中継されていることを、メモを取る振りをしてツイッターに打ち込み宣伝したところ、キーボードが格好いいとか、早速反応がきた。つまりこの研究会は閉じていないということである。

２年ぐらい前に大きな病気をし、それ以来あまり現場にたたず、マネジメントに専念している。そのため、ブルーオーシャン戦略とか、マネジメントに関する戦略論や経営論などの本ばかり読んでいた。最初は嫌いだったが読み始めるとはまってしまう。だから今回久しぶりに哲学書を読んだ。最初は大変だったが､いったんはまると最後まで一気に読めた。本では最後の方に私の話が、鷲田さんと並んで登場し、鷲田さんと同じくらい偉いかのような取り上げ方になっていた。

中岡：

むしろ田中さんの方が偉い、ぐらいの感じで書いた。

田中：

ありがとうございます。そこではスモールステップ支援が取り上げられているが、中岡さんは昔から私のことを知っているためさらっと書いている〔詳細は触れられていない〕。それゆえ今日は、そのスモールステップ支援とは何かということについて、ステップ毎に確認し、支援者（カウンセラーやソーシャルワーカーなど）がどのような影響を受け、子どもや若者がどのように変容していくのかを解説してみたい。詳しくはプラッツのブログ[5]などをみてほしいが、配付資料では表に引きこもり支援の 10 段階のステップ、裏に不登校の子どもバージョンの５～６段階ステップを紹介している。

5　淡路プラッツ URL http://www4.ocn.ne.jp/~awjplatz/

● スモールステップ支援について

表の支援表をみて頂くと 10 段階になっている。引きこもりは日本では 70 ～ 80 万人といわれている。実際にはそこにカウントされてない人が何倍もいると思うが、今から 10 年ぐらい前、私が臨床哲学に入った頃は、引きこもりの問題はマイナーであり、不登校が大きな問題だった。しかし今はニートという言葉もあり大問題になっている。地域若者サポートステーションというものが 115 箇所ぐらい全国にできた。これは引きこもりというよりはニートの人、表でいくと 4 ～ 9 ぐらいの人がいくところである。淡路プラッツはもっと手前の 4「心理面談型ニート」、 5「就労面談型ニートと」呼ばれる人達を対象とした施設である。10 年前に比べて行政の委託事業も増え社会問題になっていると感じる。支援はアウトリーチ支援、生活体験支援、就労体験支援という 3 段階に分かれている。アウトリーチ支援は親御さんの面談が主になる。だから 1 から 3 の支援対象は主に親御さん。本人は家族や外出は出来ても他の支援施設とはつながっていない。4 になってやっと支援者と出会うことになる。4 をさらに分析すると表の下に書いてあるコミュニケーション、生活訓練、レクリェーションに分かれる。 1 から 9 へと順調に進むわけではなく、行ったり来たりを繰り返しながら社会に入ったり、戻っていったりする。

● ひきこもりと変容

１番のポイントは 1 から 2 に移動するとき、家族に○がつくところである。若者がどういう状態かというと、メカニズムはよく分からず、親御さんから話を聞く限りでということになるが、長い人で 2 年、短い人で数ヶ月、親との会話を拒否していたわけだがここでやっと会話が復活する状態。斎藤環さんの昔の本の言葉に「地雷」という言葉があるが、親御さんが息子･娘に対して会話の中で地雷を踏まなければ､だんだん親とのコミュニケーションが復活してくるという。その地雷とは大きく 2 つに分けられる。 1 つ目は仕事や将来に関する話題で、 2 つ目が親御さんの健康問題に関する話題である。親が定年退職した後、親が 70 歳になって病気になった後、あるいは親が亡くなった後どうするのかということについての話題。これを出すと親御さんに対して何気ない雑談も拒否するようになるらしい。しかしこの 2 つを親御さんは一番しゃべりたいと思っている。なんとか我慢して

もらいこの２つを封印してくださいと親御さんに言うと、不思議なもので、だんだん親子関係が復活することが多い。ここで子どもにどういう変容が起きているかはわからない。今日の話題は、こういうことがあることを伝え、みなさんテーマがおありだと思うのでそのヒントになればいいと思っている。
面白いのは、一番気にしているそれら２つのことに親がふれないと、安心して、親御さんとの雑談を復活すること。これでコミュニケーションが変わっていくし元気になる。次のポイントは４のところで、支援者に○がついてる。プリント裏側の不登校バージョンの方をみてもらいたいが、ここでいうと、キーパーソンとの出会いに○がつくところに該当する。ソーシャルワーカーやカウンセラー、NPO のスタッフなどであり、これ以降、それ以外の人と徐々に会話も広がっていくようになるようだ。

● 変な人について

ある心理系の人が書いた、引きこもりの人を 20 ～ 30 人ほどインタビューした論文があり面白いのだが、それによると苦しい時をすぎて、ターニングポイントを過ぎると外に向かっていく傾向があるようだ。共通しているらしい。仕事の実感としてもキーパーソンと出会うと変わっていく。それがどういう人かというと、いわゆる変な人。事例をあげると私（＝田中）のような人。私はアニメが好きでロックが好きで、犯罪は犯さないが、社会規範からはずれている。その瞬間の、現在進行形では分からないが、こういう変な人と出会うことで若者や子どもは変わっていったと事後的に分かる。学校や仕事に行くようになり振り返った時に、あの人との出会いが私にはよかったのかなという風に思い出されるらしい。それが変な人との出会い。社会常識からずれている人というか、学校に行かなければならないとか、仕事をしなければならないとか、結婚しなければならないとか、そういった社会規範から自由になっている人に一時的に出会うと一時的に楽になっているようだ。ただ、ここがポイントだが、一生その人についていくわけではない。数ヶ月、半年、２年ぐらい付き合い少し楽になった後、また元の世界に戻っていく。ずっと私の世界に来るわけではない。そういうような出会いがある。人によっては引きこもりの訪問からはじまり、面談をして、やっとつないで、出会うことが出来て、笑顔が出てきて、俺の世界に来てくれたと思ったら、早ければ半年ぐらいで出て行ってしまう。そして俺は田中さんみたいな大人にはならないという。それは私にとっては褒め言葉。父と母のいる世界に戻っていく。

そして戻りたいと思っている。社会規範から完全に蝶番がはずれたまま生きるのではなく、元に戻り生きるほうが楽だという。
他にも背景に発達障害があったり、精神障害があったりするとそれに応じてやり方は変わるが、どういう背景があろうが、そういうステップを踏むと確実に変わっていくことは事実。

● 待つことの意味

時間の関係で「待つ」の話まではたどり着けなかったが、鷲田さんの「待つ」はよくわからない。でもたぶんデリダなどが言う歓待のレベルで、超哲学的な、根源的なレベルの待つだと思う。私が言っているのはテクニカルなレベルでの「待つ」。あまり重ならないし一緒にされると困る。私の「待つ」は一生懸命「待つ」ことではなく、テクニックとして、とにかく身体を動かして、運動して、あちこち行ったりすることも含まれている。すなわち動的「待つ」、動きながらの「待つ」。静かに「待つ」というよりも、身体を動かして動的に「待つ」ほうが、結果的に、自立という局面でみると効果的である。だから仕事ではそのように言っている。

● 待ちすぎないということ

中岡：
田中さんに関連することを質問する方が私からのレスポンスになると思うのでそうしたい。この本でも書いたと思うが、田中さんは自分のことを実践家と位置づけており、哲学者とは一線を画している。ただ臨床哲学の大学院にも入ったわけで、田中さんが思想と無縁だとは思っていない。「思想ならざる思想」というものがスモールステップなどで示されているように思うが、それはどう考えるか。

田中：
「動く」とか、「動的待つ」の元ネタはあり、具体的なことは忘れてしまったが、ドゥルーズである。『ミルプラトー』等の一連の著作を読み返して得た印象である。ただ厳密ではないから、忘れてもらった方がいい。

中岡：

「待つ」ことについて、『「待つ」をやめるとき』[6] という本を共著で出された。あれは鷲田さんの「待つ」を意識している？

田中：

これは発表と関係ないが、20 代から編集の仕事をしていたため問題提起がタイトルに入ることが必要だと思っていた。出版界の常識として、本はタイトルか執筆者のいずれかで売れるが、執筆者が無名の場合はタイトルで勝負するしかない。だから意識してないと言えば嘘かもしれないし、1 割ぐらいは意識していたかもしれない。またあの本は、淡路プラッツの歴史の中で待ちすぎてしんどくなった子どもがあまりに多かったため、それについての業界内への問題提起の意味があった。実際あの問題提起は業界内で浮いてしまった。

中岡：

タイトルが衝撃的だった？

田中：

今は待つか待たないかの二元論ではなく、メリットがあることだったら提供していこうというのが当たり前になっているが、当時は自己決定が尊重されていた。日本人は何か 1 つ尊重されるとそれに流れ、細かい微細なものに目が向かなくなる傾向があると思う。自己決定が重要となるとそれのみになってしまう。私は自己決定のみでは硬直的になると思っていたし、実際フリースクールの中には自己決定を尊重しすぎて何年も経ってしまっているケースもあり、それはまずいだろうと思った。そこで当時ご存命だった淡路プラッツの塾長と一緒に提起した。だから業界内へのアンチテーゼであったがその後数年苦労した。

中岡：

業界内の人からは反発されたということ？

6　『「待つ」をやめるとき―「社会的ひきこもり」への視線』(さいろ社、2005)。編集に、田中俊英をはじめ、金城隆一、蓮井学。

田中：

ええ。でもそれがよかった。評価はしてもらえなかったが、その一連のことがあったがために、その後自由に、例えば若者や不登校の子どもを学校に戻すことに対して自己決定の人達からはどういうことなんだといった議論があったが、そうではなく学校に戻った方がいいという子どもがいるのであれば、丁寧に応援してあげたらいいんじゃないのということがやっと語れるようになった。。

● 地雷を踏まないことと変容

中岡：

２つの地雷について。本人(引きこもりの当事者)の将来の事と親の健康問題の２つがあったが、前者はわかるとして、後者が興味深い。親の健康を問題にするのは、本人を刺激する話題ではないと思うがなぜ地雷になるのか。

田中：

今の引きこもっている状態ではダメだと本人も思っている。しかしそこから脱して明日から学校や仕事にいけるかというとそうではない。そのことを青年達は一番よくわかっている。それでどう対処しているのかといえば、今の引きこもり状態を長引かせ続けていくしかないという否定的な結論に落ち着いている。彼・彼女らは現実主義者なので、今の引きこもりを続けるには親との関係や余裕があって続けられることを１番よくわかっている。だから生きて欲しいと思っている。永遠というとオーバーだが、親の死について考えたくない。どこかで必ずやってくることはわかるがポジティブな将来を描かない。描かないように、変容しないように自分たちを固定する。今の引きこもりが変わっていくという風に想像しないように自分を戒めるためには、親がいつもでも働き健康で自分の食事や部屋をキープしてくれることが必要になる。今の生活を維持するためにお金が必要であり、そのお金の出所は親であり、したがって親には病気になってほしくない。

中岡：

逆説的ではあるが、安心するためにそういった話題は出して欲しくないというのがあるの

だろうが、とりあえず安心させて、地雷を踏まなければ変わっていくチャンスが出てくるということ？

田中：
超逆説的。普通はそこに蓋をするなと思うかもしれないが、直接言ってしまうと意固地になる。地雷を踏まずに第３者が４人目、５人目とゆっくり出会っていくと、実際ほとんど変わっていく。そこが面白い。

中岡：
ということは１つの可能性として、もしかすればそれ自体はまずいかもしれないが、地雷に触れることが何かの役に立っているということはないのか？

田中：
逆説的には役に立っているかもしれない。人によっては転換点になる。暴力を振るうなど。例えば親の健康やお金、仕事の問題に対して暴力で反応するのはその人がそれだけ意識しているということ。そういう意味では第３者にとっては役立つのかもしれない。また本人にとっても、非常に長い目で見ると、ずっと放っておくと変な平和がそのまま続くためよくないのかもしれない。ただ私からすると母親が殴られてほしくないから、激しい説教などはしてもらいたくないと思う。

Ⅱ　合評会参加者と執筆者

●　リヴィングウィルと自己

藤本：
最初の出だしの「自己＝自分ではない」というところにひっかかった。「自己」と「自分」は何が違うのか。というのは、自分自身が事前指示を書く時にただ生きること死ぬこと、あるいは自己決定という問題だけではなく、常に自分というものを問わなければならないと思っている。そこ（事前指示書）には必ず自分というものが入っており、トータルな自

分と、これまで培ってきた自分の価値のようなものがある。
事前指示についても書いておられるが、事前指示書、意識がある時の自分と無くなった時の自分がはたしてイコールであるか。元気だったときの自分が決定したことは、意識がなくなったときの自分が決定したものといえるのかという問題がある。ロナルド・ドゥオーキンの『ライフズ・ドミニオン』のマーゴの事例で言われているように、人間というものは意思がなくなったその時、この人にとって何が幸福なのかあるいは利益なのかといった経験的利益 (experiential interests) ではなく、その人の人生全体として（life as a whole）価値あるものとするような一貫した選択や信念、すなわちインテグリティ（integrity）の理念に基づいて考えるならば、私は自分が意識がなくなる前の自分が無くなった後の自分に対して行った決定は有効であると思っている。でもそれが本当に有効なのかどうか、そして責任を負わなければならないということを私は常日頃考えている。そろそろ中岡さんも事前指示をお書きになった方がいい年ではないかと思うが、どのように考えてらっしゃるか。

中岡：
事前指示の問題は何年か前に関わったところがあるが、非常に難しいということを実感した。事前指示書に具体的な項目を立てるときに、医療者の間で深刻に考えが対立することがある。実際に制度化し事前指示書を作ろうとする場合、いろんな問題が出てくるということ。
インテグリティの話だが、これは他の人がみていての話ではないか。つまり認知症や末期になって意識を失ったときに医療者や周りの人がどのようにその人らしさを考えるかという話だと思う。その時にインテグリティという理念や概念が 1 つの考え方になりうるとは思う。私は事前指示の問題を自分で考える時には、とにかく自分は死にたくない、あまりその問題を考えたくないというバカみたいな反応をしてしまう。
自己が自分とイコールではないということについては、例えば事前指示書に署名する時は、いったん署名した以上、後から、それは私ではないとは基本的に言えない。また村上さんから休み時間にご質問頂いたことだが、この本の中に「変容記号論」がある理由にも関連する。たとえばデリダ—サール論争においてジャック・デリダは、買い物リストは自分が自分に向けて思い出すために書くのだという考え方 (サールの前提) に対し、記号論的に考えるなら、メモを書いたり手紙を書いたりするのは当然書いた人とは違う存在に向けて

書いているのであって、少なくともそれは記号論的な他者に向けられていると論じた。そのような次元の違いを考えないと、メモの意味が無くなる。でもそれは結局あなた自身でしょうとか、全くの他人がメモを読んだ時と記憶は薄れているにしても書いた本人がメモを読む時では違うはずだと言われればそうだが、記号論的に考えると、発信者と受信者とが地位からして違うということを確認できると思う。それが自己＝自分ではないということの１つの意味である。

● 文体について

正置：

昨年から臨床哲学に来て非常に迷っていた。長年生きてきたにもかかわらずというか、臨床哲学の文脈の中に身を置けず言葉を失っていたような気がする。どうやってこの中で発言したらいいのか、自分の言葉を出したらいいのか、その文脈に置かなくてもいいということは感じつつ、しかし文脈はあるため、どうしたらいいのかということで迷っていた。この本はタイトルにまずインパクトを感じ読んだが、文体にとても戸惑った。最初の数ページは沿えなかった。しかしすぐに、パッチワークのように書いていることがわかった。この文体はとても面白いという言い方は失礼だが、どうやって中岡さんのところにやってきたのか。この文体も中岡さんが選ばれたものであると同時に向こうからやってきたものなのか。ここもいいなとあちこち付箋がはってあるが、非常に密度の濃い内容をこういう文体で書いてくださり、私はこれから少し言葉が出せるかもしれないという希望を感じた。

中岡：

絵本に長くかかわってこられた正木さんがおっしゃることなので、文体についてのご指摘は重く受け止めたいと思う。どこからやってきたかは私にも分からない。自己変容の哲学は講義としては何年も前からあり材料は揃っていた。今回大阪大学出版会の落合さんに声をかけて頂きまとめるにあたって、いろいろ考えてこういうふうにしたというのはあるが、どこからというのは自分でもわからない。パッチワークのようにというのはその通りかもしれない。私はパッチワークでいいと思っており、確かに無責任にばらまいている感じがしなくもないが、それぞれの「もの」の力、引用している「もの」の力を信じて、私の言いたいことを助けてもらうことも出来るかなと思っている面もある。

● ハリーポッターの解釈について

川崎：

『試練と成熟』を読んでいて一番ぐっときた、胸が熱くなる箇所がある。それは 162 頁のハリー・ポッターの話をしているところ。スネイプが、自分に宛てたものではないが「愛している」と書かれたリリーの手紙を盗む場面が紹介されている。中岡さんがハリー・ポッターで英語の練習をしていると書いており、私も映画のハリー・ポッターで英語の練習をしており思い入れがある。最後にスネイプが死ぬときに、スネイプはハリーの目を見て死ぬ。ハリーは目以外は父親ジェイムズに似ており、スネイプはジェイムズを憎んでいる。他方ハリーの母親リリーを愛しており、ハリーの目はリリーに似ている。スネイプは最後にそのハリーの目を見ながら look at me と言って死ぬ。その時のスネイプのしたことを中岡さんはどう捉えておられるのか。

中岡：

その場面は覚えているが、CD で音として聞いただけなので・・・。演じる声優の迫力ある look at me という台詞の言い回しは覚えているが、中身は気にかけなかった。リリーやハリーの目は確か緑色だったと思う。緑の目は「もの」なのか・・・人間の身体の部分は単なるものとはいえない部分もある。またその目をみてスネイプが look at me と、誰に語りかけているのかといえば、それはやはりリリーではないか。長年の対立関係にはあるが、その間にハリーという存在を認め、そこにリリーを重ね合わせ、スネイプも成長したと言えば言えるかもしれない。

● 中動態とフーコー

中岡：

著者から何か付け加えるとしたら、この本を書いてから後に考えたことに触れたい。私はこの本を書く時に、主張をすべて完成させてから表現することはせず、生煮えでもいいからその時気になったことを並べて書いた。中動態というコンセプトはその中の 1 つである。ある程度確信を持てたから出したが、これに論及する人はほとんどいない現状で、どの程

度分かってもらえるか自信はなかった。しかし取り合えず出してよかったと思う。これも中動態だ、あれも中動態だと思える事象がいろいろあり、その１つがフーコーである。フーコーは『性の歴史３　自己への配慮』の中で、帝政期、つまり紀元１～２世紀のローマ帝国についてふれているが、そこでは「自己への配慮」というのは、決して単に規則を押しつけられているのではなく、１つの手引き書として具体的な状況の中で各自がどのように反応したらいいのかについての１つの型だったのだという。そこでフーコーが言おうとし、表現しようとしていることは、単に能動的ではなく受動的でもない主体のことではないのか。今言ったとおり、彼は性を問題にし『性の歴史』という本のシリーズの中で「自己への配慮」を言い始めるわけだが、そこで論じられているある帝政期の著作家は、夢判断に関して性の話が出てきた時に、「挿入」がなされるかどうかしか気にしていないという。もし性がそのように機械的に捉えられるならば、要するにつっこんだ方が能動であり、つっこまれた方が受動であるという話になる。けれども性はそんな単純なものではなく、どこから始まったかわからないような複雑なかかわり、この本の中で書いた、「過程の中での主体」という話になるのではないか。主体を想定することが無意味になるとは思わないが、プロセスの中で主体が育ち、変わり、もしかすれば主体もまた他の存在と入れ替わってしまうかもしれない。フーコーはそんなことに注目していたのだろう。もし中動態という言葉に出会っていなければ、フーコーのその辺の議論を面白く読むこともなかった。それが私にとっての最近の発見。

●　『試練と成熟』というタイトルについて

落合：

「自己変容」というタイトルをみて、人間がはっきりと変わること、例えばいろんな経験をして向上していくとか、思慮深くなっていくとか、そういったポジティブな意味で変わる、あるいは老化して衰えるというような人生上の変化として最初は理解していた。しかし中岡さんの自己変容の意味はもっと広いものだということに気がついた。自己変容とは自分が変わる、関係する他者が変わる、人間だけでなくものも生き物も変容するということであり、さらに変わるとは自己と世界とのつながりが変わったり、意味が変わったりすることであり、自分にしがみつくだけではないことが繰り返し読む中で分かってきた。亡くなった林竹二さんという教育学者が、人が何かを理解するということはその人が変わる

ことであると、強い意味で変わるということを言っていた。それに比べると中岡さんの「自己変容」はずいぶんと多様な意味をもつ、可塑性のある言葉だと思った。
人間は変わるが悪く変わることもある。そうならないためにはどうしたらいいかということ、例えば何かに固執してしまうと悪いように変わることもありうるということを、親身になって説き、よく変わることを励ましてくれているというふうにも受け止めることができた。「もちこたえる」というのはズシンとくる。事例を１つ１つ噛みしめていくとそれだけでも非常に味わいがある。深い意義が次々出てくる。そういうふうに、著者がこの本でもって人間がいい方向に変わることを励ましてくれていること、それが大事なことかなと思う。
またタイトルについて、試練という言葉を出されているが、本文の中で試練という言葉は使われていないのではないかと思う。あとがきで書かれているように、こういうのはどうでしょうかと編集者として私から提案したわけだが、「試練と成熟」という、言ってみれば平板な通俗的なタイトルになってる恐れはある。はたして本文の深さに釣り合っているのか。「受動と能動」、あるいは「受動と能動と中動」という題にした方がこの本にはふさわしかったのではないかと思った。

中岡：
「受動と能動」だと売れそうにない。さっきの田中さんの話ではないが、タイトルか著者か、どちらかで売るとしたら、私の名前はそれほど一般には知られていないため売れない可能性が今以上にあると思う。だから「試練と成熟」というタイトルを提案して頂いて、私も納得しているので、このタイトルでいいと思う。
また変容価値論のところで、良い変容もあれば悪い変容もあると書いたが、では良い悪いを誰が決めるのかということになる。これは授業でも質問されたことで、変容援助論ということをいった時に、何を基準にして援助するのかが一番大きな問題だと思う。プロとして援助したことはないが、自分の身近で出来る範囲の経験から、明確な方法論はないかもしれないということも含めて考えている。だから変容価値論でははっきりとした良い悪いがないということを言いたかった面がある。それはいうなれば理論家としての私の言葉であり、実践というか、「援助論」を書いたときは違う。もちろんあそこを書くに当たっては田中さんなどに全面的に負うているところはあるが、私の個人的な、プロではない個人としての援助経験を踏まえて書いたことである。その時点時点において、自分が信じたこ

とや、その人にとってこれがいいと思える援助をするしかない。それは私なりに割り切ってやった。理論的にいえばそれは「複雑性の縮減」ということ。これはルーマンのシステム論、ヘーゲルの次に私が影響を受けた思想だが、それに示唆を受けたところがある。ある局面についての援助の仕方や、どちらにもっていったらいいかということを判断する時、この思想が私なりの問題の整理の仕方につながっていっている。そういうふうな事で、方向性が通俗的かもしれないが、分かってもらえなければ意味がないわけだから、理論家じゃないとわからないとか、理論的にうやむやになってしまってさっぱりわけがわからないという印象を読者に与えるよりは、そちらを選びたいと思った。
ただ、あるカント研究者から、いかにも名前の付け方がヘーゲルくさいと言われ、ムカッと来たということはある。ヘーゲルは「試練と成熟」という言い方はしなかったと思う。ヘーゲルの言う弁証法的過程には、落としどころはなく、むしろ永遠の革命、乗り越えが続くと私は受け止めているので、「成熟」は訪れないと思う。

● 中動態について

西川：

村上さんが事例のところでひかれた直後の、バルトの話を出した後に「いつから、哲学者は任意の「対象」を任意に選んで、対象の対象性を気にかけることなく、自由に論理を操れるもの（絶対的＝自動詞的に問う者）となったのか。それに対して、自動詞的に問うことを自らに許さないということが、臨床哲学者の臨床性の重要な一部だ。」（『試練と成熟』159）という文章がある。今日も中動態という話があったが、あるダンサーが臨床の人とダンスを踊るという、きちっと予めプログラムできるわけではない、どちらの側にもその2人のダンスを形作るものがあるわけではない、しかし1つのダンスが出来上がってくるという場面を目にした時に、私も中動態の話をしたことがある。また九鬼周造に「みずから」と「おのずから」に関する論考があり、自らという能動と、自ずからという受動と、その両方を含む中動態というところで人間の様々な関係が成り立っているのではないかということを議論したことがある。成熟ということも中動態的な意味合いが強いのかなと思う。
臨床性といった時に、自らが語らない、自動詞的に語らないというのは、昔看護師として勤務していた時の経験からもそういえる。自分が何かしていくというのは臨床家のタイプではい。予めそこに身を呈した時に何が起きているのかというそこに臨床が始まる。患者

さんからの訴えからだけでなく自分が会うということ。目があうでもそうだが、見ると見られるということが同時に両者の間でおきなければならないし、どちら側からもコントロールできない。関与しているもののどちらもコントロールできないことが成就したということ、そこから始まる。個人や自発性に重きを置いたり一人の意識から始めたりすることとは随分と違った哲学のありかたであり、実践に対する反省の仕方であると思う。中岡さんのおっしゃる試練と成熟にもそういう側面があると思う。

中岡：

その通りだが、そう言ってしまうと人間は常にそうですみたいな話になってしまうため、私自身もこの中動態という話をどの程度広げていいのか気になりかけている。それはそれとして、さっきのダンスの話はすごく面白い。それこそが中動態かなという気がする。臨床哲学との関係ではこうも思う。鷲田さんが「聴くことの力」ということを言い、受動を強調しているが、鷲田さん自身は意外とよくしゃべってるよとか、あまり聴かないよとか言われることもあり、そういった個人的なことも含めて、結局は聴くことがどこから始まっているのかということが気になる。西川さんの話でも、とりあえず自分は黙っておこうという趣旨ではなく、むしろ引き出す力をどこかで振るわなければならないという前提がある。その辺のことを考えると、この言葉 (中動態) を使ったからといって、事態がより明らかになるかどうかはわからないが、聴くことの力も中動態なのかもしれないと、後から考えてそういう気がしている。

●　自己変容と中動相 (中動態) の関係について

浜渦：

まだ読めておらず、発言するつもりはなかったが、話を聴きながらタイトルから抱いていたイメージと中身が違うということが分かった。また『試練と成熟』というタイトルにはビルドゥングスロマン的なイメージがあり、どこに中岡さんの狙いがあるのかわからなかったが、何をやろうとしているのか少し分かった気がする。

私も「成熟」について書いたことがあるが、それは成熟の間主観的次元に関すること。すなわち成熟というのが一人の出来事ではなく、人と人との間で起こることではないのか、一人のことを特徴づけるのではなく、その間の出来事なのではないかということを書いた。

私としては、ビルドゥングスロマン的なものとは違うものとして書いたつもりだが、今日の話を聴く限り、中岡さんも、自己と他者が簡単に分かれているわけでなく自分の中には自己とも他者とも区別できない空間があるということ、また自己変容は自分の変容と相手の変容との両方を伴ってくるものであるということなどにふれており、私の書いたこととそれほど違うわけではないとわかった。
また『試練と成熟』というタイトルは必ずしも中岡さんの言いたいことではなく、自己変容の哲学と中動相 (中動態) にあるとのことだが、中動相については、木村敏さんが最近盛んに扱っている。面白いのは、ギリシャにあった中動相はその後なくなってしまい、ドイツ語では再帰動詞になっていること。再帰動詞には 2 つの場面がある。自分の中では再帰的ということ、そして複数の中では相互的ということ、その両方の意味を取り込もうとしていると思った。それで自己変容という言葉もおそらくドイツ語だと sich ändern とか sich verändern とか 、そういう言葉になると思うが、それがはたして自己変容という言葉が適切なのか。フッサールでは構成という言葉が出てくるが、しばしば sich konstituieren という表現を使う。つまり再帰動詞を使っている。その意味を考えると、再帰動詞は能動でも受動でもない、世界が間主観性で構成されるのであって主観性や意識が世界を構成するわけではないというニュアンスがある。自己変容というと自己を変容させるというニュアンスがあるが、自ずから変わってくるというニュアンスが強いのではないかと思う。自己変容という言葉も、中動相のイメージが自己変容の言葉の中にうまくもりこまれてないような気がしている。おっしゃりたいことは、中動相で語られた方がもっと分かる気がするが、自己変容という言葉にこだわりたかったというのがあるのか。

中岡：

確かに哲学的に考えると非常に大きな問題で、気がついていなかったわけではないのだが、とりあえず自己変容という言葉のままでいった。何年も前のある会議で、対人援助の専門の方が自己変容という言葉を使っているのを聞き、その言葉がずっと残っていたという経緯があるのだが、どういう言葉がより中動相性 (中動態) を表現できるか今は分からない。浜渦さんはいま再帰動詞に言及されたが、反省という事象について考えてみると、自らを省みるという時の、省みる自らと省みられる自らは同じ存在なのかという話は前からあると思う。これは単に誰が誰をというだけでなく、私の考えではむしろそこにズレがある方が自然である。完璧にサイクルが閉じてしまうことがむしろ不自然になるのではないか。

人間の有機体性というか、人間が意識としてあまりにも透明にされてしまわないということに人間の救いがあるような気がしていて、そのこととも関係する。反芻という言葉もあって、それを反省するという意味で使うこともあると思う。他方、反芻という言葉を悪い意味で、例えば事態は変えようがないのに、主体が病的にそれに返ってきてうじうじと考え続けるという意味で使われることもある。その比較でいえば、反省の方が (反芻より) 先に進んでおり、新しい要素を盛り込んで獲得していくことがあるのかなと思う。ネガティブな意味での反芻ということと、ポジティブな意味での反省を分けて考えたい。その時に、誰が誰にとか、何が何をとかいうふうに、出どころと受けどころを考えてみたらどうかなとか思う。

● 安全圏に身を置かないこと

紀平：
最後の部分が気になった。自分を安全圏におかないこと。自分を離れたところから自分を照らし返すこと、と書いてある。確かに中岡さんを見ていると安全圏に身を置かないような気もしつつ、この安全圏に身を置かないことということの意味は何なのか。

中岡：
それは職業的な秘密なので言えない。安全圏に身を置かないと言ってみた。言ってみたかった。言った以上はその言葉に自分が触発されることを試してみたかった。それだけ。この本を読んだ、ある哲学研究者といっていい方から、こんなことを書いているがあんたの精神は大丈夫かと危ぶむ手紙を受けとったが、いまのところ知らんぷりをしている。果たしてどうしたらいいかと思いなづむ面もあるが、それも含めて自己変容だと思う。この本の副産物としての変容もあるかもしれない。

● 書くということ／自らを試練にさらすこと、実践すること、そして哲学

文元：
アマゾンレビューでは星評価 1 つで、哲学書としてではなくエッセイとしてなら読めるといったような事が書いてある。

本間：

いまのアマゾンの感想について、社会というか、一般にはそういう風に受け止められているというのは興味深い事実だと思う。もしこれが哲学書ではないとすれば、その方が哲学書をなんと思っておられるのか。例えばまさしくフーコーが『自己への配慮』の中で書いていることで、自らを試練にさらすということはまさしく実践であって、もしこれが中岡さんの実践の記録であるとすれば、その意味での書くということ、そしてそれを見せるということ、そしてそれについて話すということ自体は、フーコーが言う意味での自己への配慮の例としてもみえるし、そういう哲学の復活としてもよめるかもしれない。しかしそれは本質的には哲学書ではないと呼ばれるこの時代とは何なのかと考えさせられた。

中岡：

実践ということを考えていたのは確か。また哲学書として受けとめられるかどうかだが、相当前から、本を書くときにそのことを考えることは止めている。

本間：

ヘーゲルにしても、『精神現象学』というあそこまでわけのわからない、書物とも言えないような書物を書いたが、そういう本を書くということについては今回かなり自覚的にのぞまれたのか。

中岡：

『精神現象学』をなんですって？

本間：

ヘーゲルのあの本が哲学書といえるのかどうか。歴史の蓄積によってあの本は哲学書だと言えるかもしれないけれども、あれはそもそも書物なのか、あるいは何なのかということについて、ひょっとすると答えはまだ出ていないのかも知れず、その辺を意識されて自己変容について書かれるという、どういう自覚的な見通しをもって書かれたのかなということが知りたい。

中岡：

答えになるかわからないが、ヘーゲルが精神と呼んでいるものを、一応みな精神だと思い、観念論とか絶対観念論とか称しているわけだが、私は彼のいう精神というのはある意味では主体であって主体でないと思う。その意味では中動態そのものであるという気もしている。だからヘーゲルが方法論的にやろうとしたことを私なりに少し試してみたいと思ったというのはあるかもしれない。ただ特に意識していたわけではない。しかし『精神現象学』のあのような射程は当然持てない。それをやろうとは思ってない。

● 哲学史研究と臨床哲学

寺田：

この研究会の告知で取り上げられておりこの本の出版を初めて知り購入したため、まだ十分に読めておらず理解できてないところも多いが、文元さんとのやりとりで出てきた、ヘーゲルを臨床哲学と結びつけて考える試みをしておられるということについてもう少し伺ってみたい。読んでみて、中岡さんのベースがヘーゲルであることはよく分かった。たぶん私が在籍していた頃は、ヘーゲルと臨床哲学を直接結びつけて話されたことはなかったが、それから 10 数年経ち、その事が鮮明に見えてきた。しかし、ヘーゲルがベースになること、考え方の基礎になっているのはよく理解できるし、私であればカントが基礎になってるところがあって、考え方やスピリットという面では、過去の哲学者の書いたことや考えたことが生きているというのはわかるが、臨床哲学の学生だった頃からずっと難しいと思っていたのは、自分で臨床哲学をするときに表現としてどう使っていいのかということであった。昔も今もよくわからないところがある。現象学をバックグラウンドに持ってる人達は比較的そういうことが自由に出来ているように思うが、ヘーゲルやカントではやりにくいところがあると思う。最近始められたヘーゲルと臨床哲学を結びつける試みというのは、具体的にはどのようなことを考えておられるのか。

中岡：

ヘーゲルを授業でとりあげたのはそれほど最近のことでもない。確か西川さんが院生の頃から「主と奴」（『精神現象学』の「自己意識」に出てくるモチーフ）の話はしていた。た

だ tentative に、どうかなと思いながらやっていた。いずれにしても、私がヘーゲルの体系や方法論を使うとか引き継ぐとかそういう言い方はできない。ヘーゲルの弁証法全体を肯定しているわけではない。むしろ、弁証法の理解という意味では綜合されない、アドルノ的な否定弁証法の方が私にはぴんと来る。ただ否定弁証法というのも気が差すし、私の意に適っている気もせず、何か言うとすれば「媒介」ということ。直接的なものは何一つ無い、すべては媒介されている（だから変容していくし、変容するべきだ）といったことがヘーゲルの発想の根本だと思う。その発想を一つ一つの素材に合わせて明らかにしていくことができれば、それが現場の実践ということにも、多分つながっていくと思う。それは方法論の問題でもあるが、素材の問題、素材とか人間の関係性などとの関わりの問題だと思っている。それをどのようにほぐして伝えていくのか。ヘーゲルの方法論を代弁するとか全的に実現するとかいうつもりは私にはない。カントでも出来るのではないか？

寺田：

カントにも世界市民の哲学という構想があり、これは臨床哲学のことだと思っている。スピリットの部分ではそういえると思うが、個々の発想などをどう活かすかとなると私はよくわからない部分がある。

中岡：

寺田さんは慎重なところがおありだと思うし、気持ちはよく分かるが、敢えてやってみるとそれがもう一歩先につながっていいのではないかと思う。

村上：

カントはすごい使えると思う。私はドイツ語はそれほどできないし、詳しいわけではないが、かなり使えると思う。自閉症のことをやったときにはカテゴリーの原則論を使ったし、看護研究のインタビューをやったときは、皆さん反省的判断力を使っているし、その問題に直に関わってくる。ここのパーツはすごい使えると思うが。

寺田：

たしかに、反省的判断力はそうだと思う。臨床的判断力は反省的判断力のことだと･･･

村上：

それ以外の何ものでもないですよね。

寺田：

それが実際どういう風にはたらくのかとか、そういうことを考えるとなかなか難しい。

村上：

まさにそこでカントのテキスト解釈ではない仕方で読む材料があると思う。

（編集：桑原英之・大北全俊）